中学生の性に関する意識と自尊感情
ー思春期講座事前アンケート調査からー

学校保健　河　田　史　宝

1．はじめに

ここ数年，思春期の若者を取り巻く社会環境の急激な変化は，若者の性意識や性行動にも変化を引き起こしている。その結果，性経験の早期化，性交相手の複雑化が進んでいることが指摘されている[1,2]。また，人工妊娠中絶の総数の中の10代の占める割合の増加や性感染症の増加も地域性を問わず増加傾向を示している[3,4]。文部科学省も今次の学習指導要領改定において，児童の心身の発育・発達の早期化を踏まえて，今まで小学校高学年の内容として示されていた体の発育や発達についての学習を「育ちゆく体とわたし」として小学校３・４年生で保健学習を実施することを盛り込むなど，教育的な側面からの対策を行っている。

生徒，保護者，教師が参加する思春期講座を開催するにあたって，生徒の性に関する不安や悩みの現状をとらえるためにアンケート調査を行い検討したので報告する。

2．アンケート調査

(1)　調査方法

３年生男女156名を対象に2002年６月14日に自記式質問紙を用い無記名により行った。学級担任が各学級で調査の目的と記入方法を説明し実施した。調査用紙は，記入後中表に折り曲げて回収し，プライバシーに配慮した。回収率は100.0%，有効回答率は91.7%で男子51.6%，女子49.0%であった。

調査内容は，対象者の背景，自己の税の受容，性に関する不安や悩み，自尊感情等である。自尊感情は，Rosenberg（1965）が作成したSelf-Esteem Scale 10項目を，松本ら（1982）が翻訳した自尊感情尺度を用い，「あてはまらない（１点)」「ややあてはまる（２点)」「どちらともいえない（３点)」「ややあてはまる（４点)」「あてはまる（５点)」の５件法とし，10項目の合計得点を尺度得点とした。ただし，逆転項目は５点を１点に，４点を２点に換算して合計得点を算出した。したがって，最も自尊感情の高い者は50点，自尊感情の低い者は10点となる。データーの解析にはパーソナルコンピュータを用い，統計プログラムパッケージ「SPSS for Windows 10.0j」を使用した。

(2)　対象者と背景

図１に，既習学習の内容を示した。男女とも最も多かったのは体の変化であった。次いで，男子では，心の変化，エイズ，受精，精通の順に多く，女子では初経，体の変化，エイズ，精通の順であった。初経は，性差に有意差が認められ（$\chi^2=26.53$，df＝１，$p<0.001$），男子に比べて女子が多く示された。

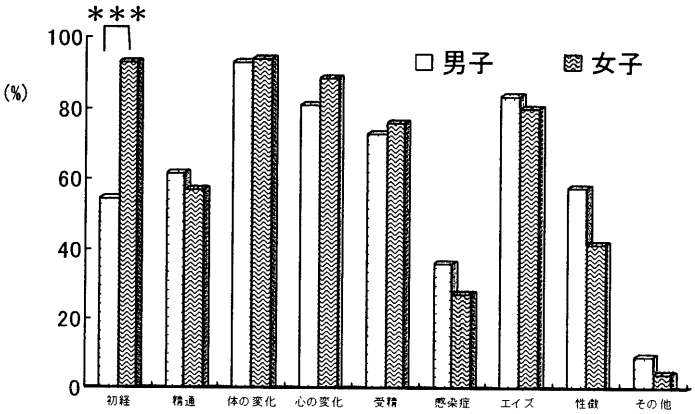

図１　既習学習の内容（＊＊＊：$p<0.001$）

表1に，自己の性の受容を示した。男女とも「自分の性を良かった」と答えた者が男子61.1%，女子52.9%と最も多く，次いで「どちらともいえない」「反対なら良かった」であった。男女間の有意差はなかった。

表2に家族や異性との関係を示した。

家族と性に関する話をしたでは，男子は話していないが64.4%と多く，女子では話したが72.9%と多く，男女間に有意差をみとめた。（$\chi^2=24.13$，df＝2，$p<0.001$）

現在，1対1で付き合っている異性の有無では，「付き合っている異性がいない」と答えた者が男子61.6%，女子57.1%と多く，次いで「以前いた」「いる」の順であった。男女間の有意差はなかった。

中学生の異性との関係はどこまで良いかについては，「キスをする」が男子26.0%，女子35.7%とも最も多かった。次いで男子では「手をつなぐ」19.2%，「一緒に話をする」17.8%，「性交をする」15.1%が多く，女子では「手をつなぐ」24.3%，「性交をする」18.6%，「体に触れたりする」10.0%が多く示された。男女の間では有意差はなかった。

表1　自己の性の受容

		男子	女子	合計
自己の性の受容	今の性で良かった	61.6	52.9	57.3
	反対なら良かった	8.2	17.1	12.6
	どちらともいえない	30.1	30.0	30.1
		51.0	49.0	100.0

（%）

表2　家族や異性との関係

		男子	女子	合計
家族と性に関する話題***	話した	35.6	72.9	53.8
	話していない	64.4	24.3	44.8
	無記入	0.0	2.9	1.4
一対一で付き合っている異性	いる	13.7	14.3	14.6
	以前いた	24.7	27.1	25.9
	いない	61.6	57.1	59.4
	無記入	0.0	1.4	0.7
中学生の異性との関係はどこまで良いか	一緒に話をする	17.8	2.9	10.5
	手をつなぐ	19.2	24.3	21.7
	体に触れたりする	15.1	10.0	12.6
	キスをする	26.0	35.7	30.8
	性交をする	15.1	18.6	16.8
	人によって違う	2.7	5.7	4.2
	わからない	4.1	2.8	3.5
		51.0	49.0	100.0

＊＊＊：$p<0.001$　（%）

性情報の情報源性情報の情報源は図2に示した。男子では同性の友達，保健体育科，先輩の順に多かった。女子は，同性の友達，保健体育科，養護教諭の順に多かった。男女間では，母，養護教諭，異性の友達，先輩，エロ本の間で有意差がみられた（$\chi^2=19.18$，df＝1，$p<0.001$，$\chi^2=24.84$，df＝1，$p<0.001$，$\chi^2=5.31$，df＝1，$p<0.05$，$\chi^2=14.59$，df＝1，$p<0.001$，$\chi^2=6.62$，df＝1，$p<0.01$）。母，養護教諭，異性の友達から性情報を得る者は，男子に比べて女子に割合が多く，先輩，エロ本から性情報を得る者は，女子に比べて男子に多かった。

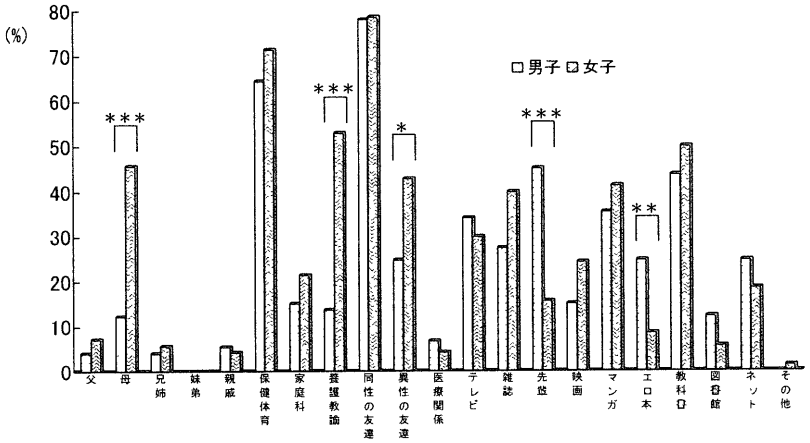

図2　性情報の情報源（複数回答）

（＊：$p<0.05$，＊＊：$p<0.01$，＊＊＊：$p<0.001$）

(3) 性に関する不安や悩み

① 性に関する不安や悩みの有無

性に関する不安や悩みの有無を図3に示した。性に関する不安や悩みがあると答えた者は男子79.5%，女子85.7%で，男女ともに不安や悩みがないと答えた者に比べて，ある者と答えた者が多かった。男女間の有意差はなかった。

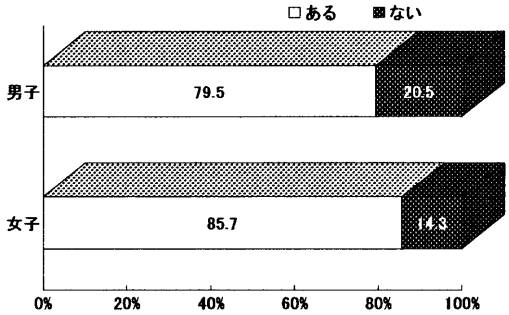

図3 性に関する不安や悩みの有無

② 性に関する不安や悩みとその内容

性に関する不安や悩みがあると答えた者の不安や悩みの内容を図4に示した。悩みの内容では，男子は男女交際39.7%，声変わり15.1%，性欲6.8%，悩みがない20.5%の割合が高かった。女子では，男女交際60.0%，乳房で44.3%，月経42.9%，おりもの41.4%の割合が高かった。男女ともに男女交際について悩んでいる割合が高かった。女子では男子に比べて，月経，乳房，おりものなどのからだに対する不安や悩みがあると答えた者の割合が高かった。

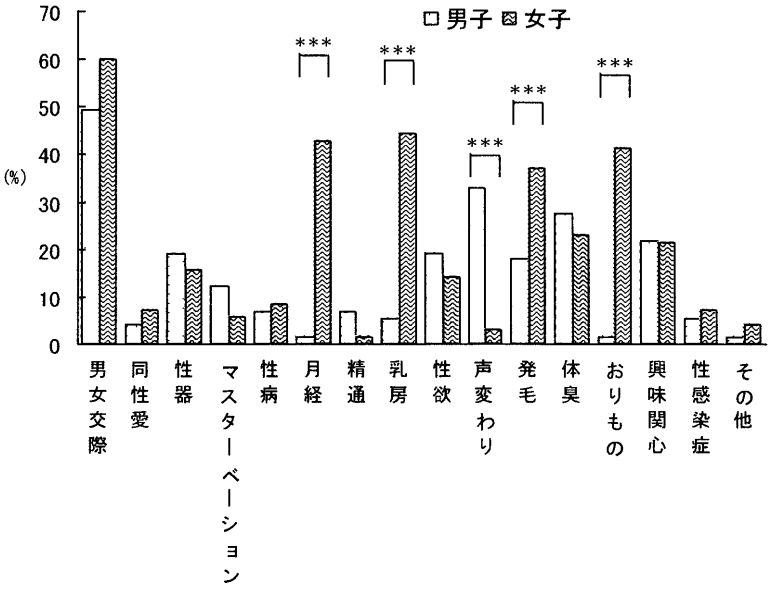

図4 性に関する不安や悩みの有する者の割合（＊＊＊：$p<0.001$）

③ 性に関する不安や悩みの数

性に関する不安や悩みの数は，平均2.88±2.69個であった。男女別では男子2.33±2.17個，女子は3.37±3.07個であった。t検定の結果，男女の間に有意差を認め，男子に比べて女子に不安や悩みの数が多かった（$t=2.33$，$df=141$，$p<0.05$）。

不安や悩みの数を，悩みのない者と，不安や悩みが平均2個以下の少ない者，3個以上の多い者に分け，その結果を図5に示した。男子では，悩みの少ない者が39.7%と最も多く，次いで悩みの多い者，悩みのない者であった。女子は悩みの多い者が51.4%と最も多く，次いで悩みの少ない者，悩みのない物であった。男子では悩みが少ない者が多く，女子では悩みの多い者が多かったが，男女の間に有意差はなかった。

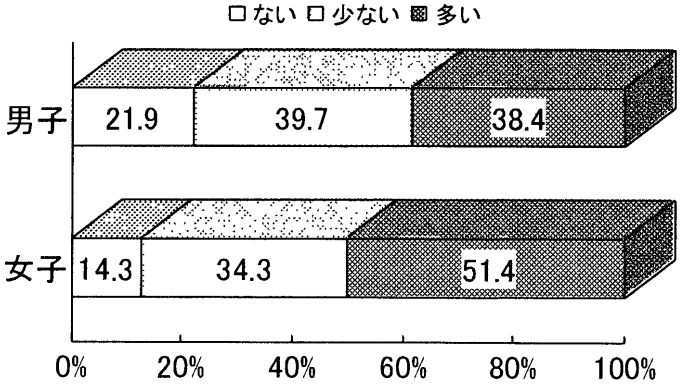

図5 男女における悩みの数

(4) 自尊感情

自尊感情尺度の平均得点は，31.14±6.54であった。自尊感情の分類は，平均得点＋0.5SD以上を高い群，平均得点＋0.5SDより小さく平均得点－0.5SDより大きい者を中間群，平均得点－0.5SD以下を低い群の3群に分けた。その結果を，男女別に図6に示した。男子では低い群16.4%，中間群43.8%，高い群39.7%で中間群の者が多かった。女子では，低い群40.0%，中間群45.7%，高い群14.3%で中間群の者が多かった。男女の間に有意差を認め（$\chi^2=15.60$，df＝2，$p<0.001$），男子に自尊感情の高い者が多く，女子に自尊感情の低い者が多く認められた。

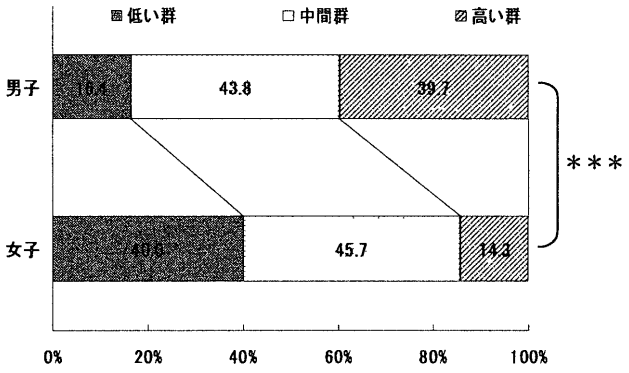

図6　自尊感情の分類（＊＊＊：$p<0.001$）

(5) 性の受容と自尊感情

男女別に性の受容と自尊感情を図7に示した。男子では，いずれも中間群の割合が最も多く，ついで高い群が多かった。有意差は認められなかった。女子では，「今の性が良い」と「どちらともいえない」と答えた者は中間群が多かった。「反対の性が良い」と答えた者は，低い群が多かったが，有意差は認められなかった。

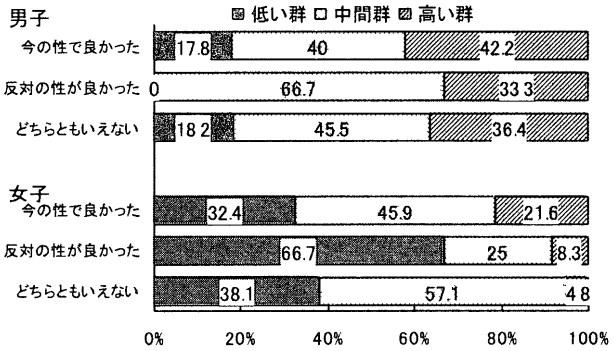

図7　性の受容と自尊感情

(6) 性の不安や悩みの有無と自尊感情

性に関する不安や悩みの有無別に自尊感情との関係を図8に示した。不安や悩みがあると答えた者では，男子は中間群の者が多く，ついで高い群，低い群が多かった。女子は，中間群の者が多く，ついで低い群，高い群が多かった。性差で有意差（$\chi^2=11.41$，df＝2，$p<0.01$）がみられ，不安や悩みがあると答えた者は，男子に比べて女子に低い群の者が多く，男子に高い群の者が多くみられた。性に関する不安や悩みがないと答えた者では，男子は高い群が最も多く，ついで中間群が多かった。女子では中間群が最も多く，次いで高い群，低い群が多かった。

男女別に，性に関する悩みや不安の有無を図9に示した。男子においても女子においても悩みの有無と自尊感情の間に有意差はみられなかった。

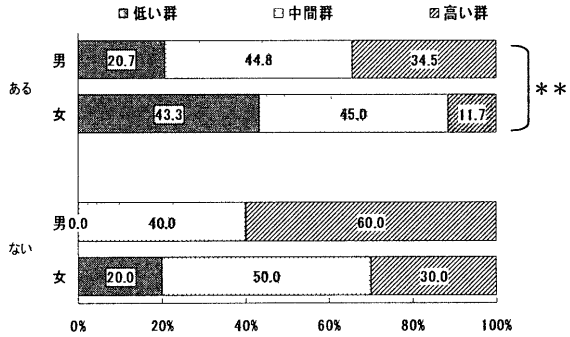

図8　性に関する悩み不安と自尊感情

（＊＊：$p<0.01$）

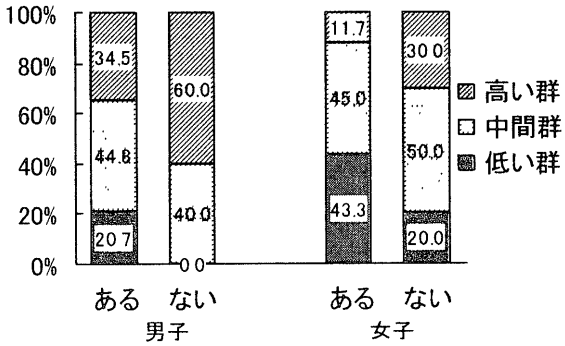

図9　男女別の性に関する不安や悩みと自尊感情

(7) 性に関する不安や悩みの内容と自尊感情

性に関する不安や悩みの内容と自尊感情を男女別に図10に示した。男子では，性病，発毛，体臭において有意差が認められた（$\chi^2=8.55$，df＝2，$p<0.05$，$\chi^2=7.05$，df＝2，$p<0.05$，$\chi^2=12.09$，df＝2，$p<0.05$）。性病に対する悩みがある者に低い群が多く，ない者に中間群が多かった。発毛に対する不安や悩みがある者に低い群が多く，ない者に高い群が多かった。体臭に対する悩みがある者に低い群が多く，ない者に高い群が多く示された。女子においては，性に関する不安や悩みの内容と自尊感情の間に有意差は認められなかった。

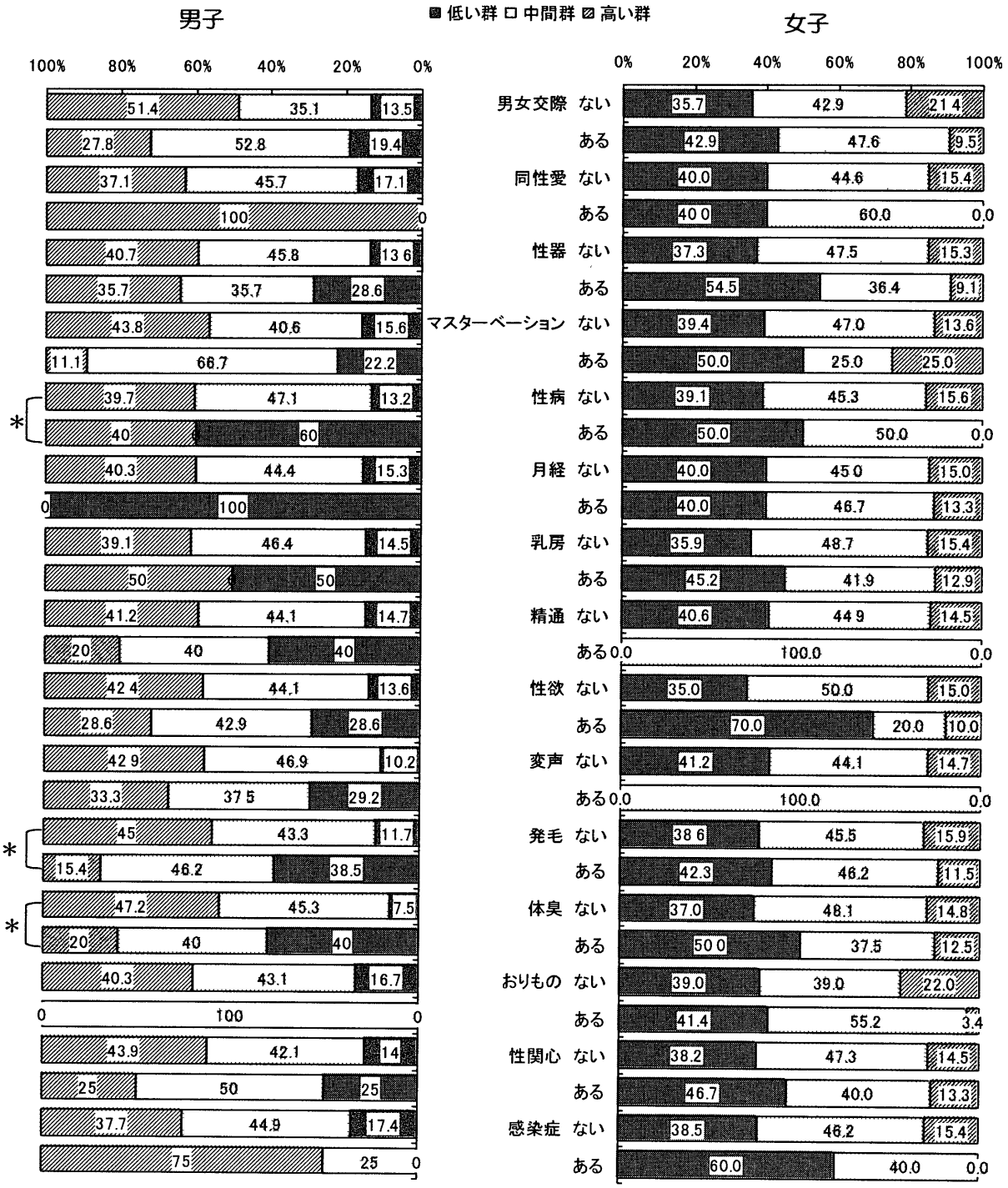

図10 男女別の性の不安や悩みのない様と自尊感情（＊：$p<0.05$）

(8) 性に関する不安や悩みの数と自尊感情

男女別に，不安や悩みの数と自尊感情を図11に示した。男子では，悩みのない者は自尊感情の高い群が多く，次いで中間群が多かった。悩みの数が少ない者は，自尊感情の中間群が多く，次いで高い群，低い群であった。悩みの数が多い者は，自尊感情の中間群が多く，次いで高い群，低い群であった。男子では，悩みの数と自尊感情において有意差が認められ（$\chi^2=11.17$, df＝4，$p<0.05$），悩みのない者は悩みのある者に比べ自尊感情の高い群の者が多く，悩みの少ない者は悩みのない者や悩みの多い者に比べて中間群の者が多く，悩みの多い者は悩みのない者や悩みの少ない者に比べて自尊感情の低い群が多く示された。女子では，悩みのない者は自尊感情の中間群が多く次いで高い群，低い群であった。悩みの少ない者では自尊感情の低い群が多く，次いで中間群，高い群であった。悩みの数が多い者では自尊感情の中間群が多く，次いで低い群，高い群であった。女子の悩みの数と自尊感情の間では，有意差は認められなかった。

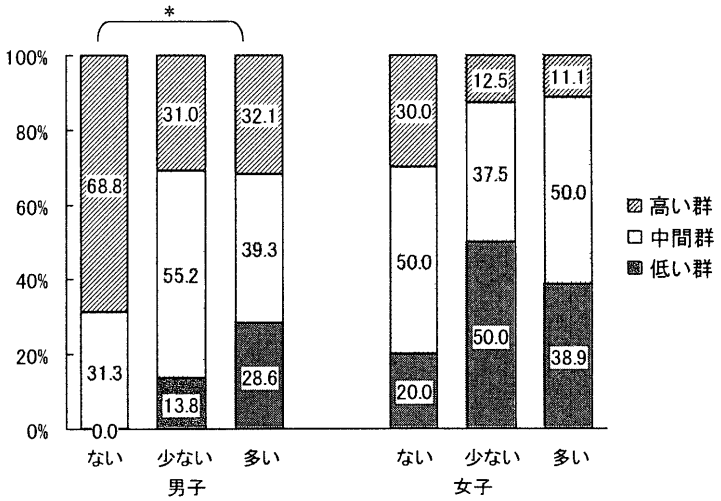

図11　不安や悩みの数と自尊感情（＊：$p<0.05$）

(9) 自己意識と自尊感情

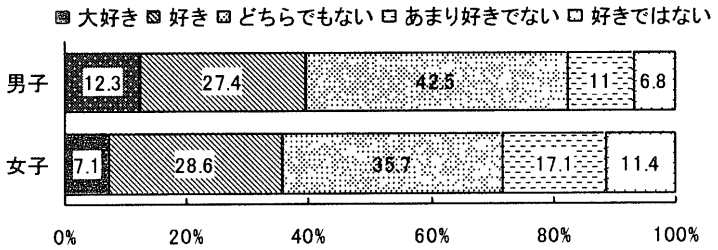

図12　自己意識「好き」

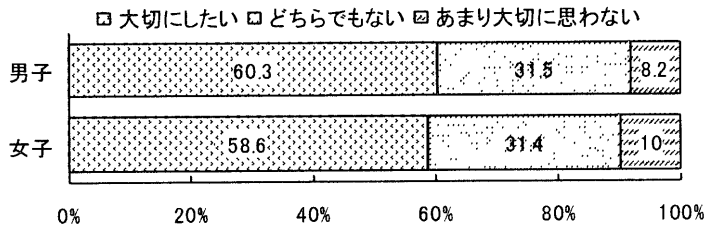

図13　自己意識「大切にしたい」

自己に対する意識(以下，自己意識)「自分自身が好き」について図12に示した。男子では，「どちらでもない」と答えた者が最も多く，次いで「好き」，「大好き」と答えた者の順に多く，女子でも「どちらでもない」と答えた者が最も多く，次いで「好き」，「あまり好きではない」と答えた者が多かった。男子に「大好き」と答えた者の割合が多く，女子に「あまり好きではない」「好きではない」と答えた者の割合が多かったが，男女の間に有意差は認められなかった。

自己に対する意識「大切にしたい」について図13に示した。男子，女子ともに「大切にしたい」が最も多く，次いで「どちらでもない」，「あまり大切に思わない」の順であった。男女の間に有意差は認められなかった。

自己意識「好き」と自尊感情尺度得点を図14に示した。男子では，「好き」と答えた者の得点が高く，次いで「大好き」「どちらでもない」「あまり好きではない」「好きではない」の順であった。女子では，「大好き」と答えた者の得点が高く，次いで「好き」「どちらでもない」「あまり好きではない」「好きではない」の順であった。一元配置分散分析により５群と自尊感情尺度得点を比較した。その結果，男子に

有意差を認めた（F(4,68)＝10.83, p<0.001）。下位検定を行った結果，「大好き」は，「あまり好きではない」（p<0.05），「好きではない」（p<0.05）の間に有意差を認め，「大好き」と答えた者の自尊感情尺度得点が高かった。「好き」は「どちらでもない」（p<0.001），「あまり好きではない」（p<0.001），「好きではない」（p<0.001）の間に有意差を認め，「好き」と答えた者の自尊感情得尺度得点が高かった。女子でも有意差を認めた（F(4,65)＝8.17, p<0.001）。下位検定を行った結果，「好きではない」と「大好き」（p＜0.001）「好き」（p＜0.001）「どちらでもない」（p<0.001）の間に有意差を認め，「好きではない」の自尊感情尺度得点が低かった。

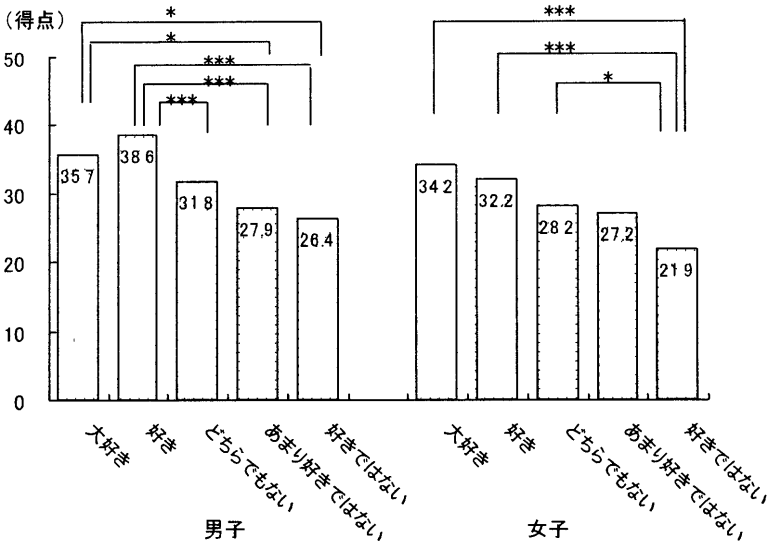

図14　自己意識「好き」と自尊感情得点

（＊：p<0.05，＊＊＊：p<0.001）

自己意識「大切」と自尊感情尺度得点を図15に示した。男女ともに「大切にしたい」と答えた者の自尊感情尺度得点が高く，次いで「どちらでもない」「あまり好きでない」の順であった。一元配置分散分析により３群と自尊感情尺度得点を比較した。その結果，男子に有意差を認めた（F(2,70)＝3.29, p<0.05）。下位検定を行った結果，有意差は認められなかった。女子においても有意差を認めた（F(2,67)＝9.37, p<0.01）。下位検定を行った結果，「大切にしたい」と答えた者と「どちらでもない」（p<0.01），「あまり大切でない」（p<0.01）の間に有意差を認め，「大切にしたい」と答えた者の自尊感情尺度得点が高かった。

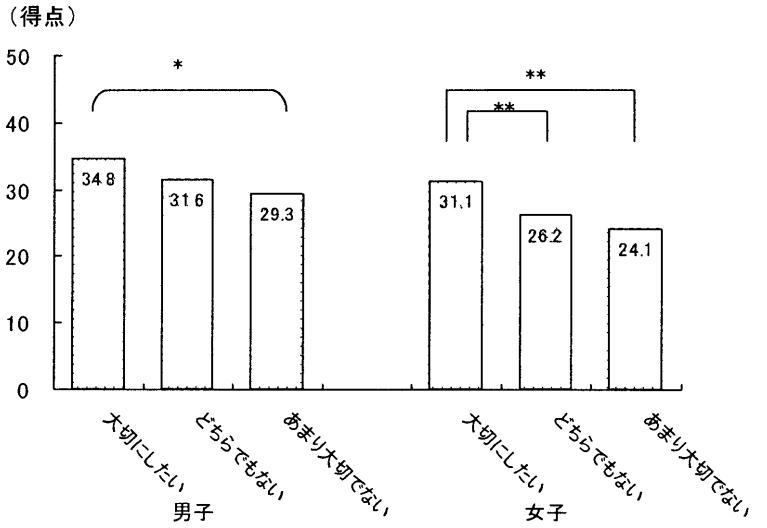

図15　自己意識「大切」と自尊感情得点

（＊：p<0.05，＊＊＊：p<0.01）

3．結果

思春期の子どもたちは，２次性徴という身体的・性的変化を自分のこととして受け止めていく時期であり，このことは，思春期の一つの発達課題だともいえる。小学校５・６年の保健学習では，児童の心身の発育・発達やエイズに関する学習がなされている。既習学習のうち初経では，男子に比べ女子に既習学習者の割合が多く，このことは，養護教諭から女子に対して初経の指導が行なわれ男子とは別に学習したことが影響していると考えられる（図１，２）。また，女子では母親と性に関することを話すことが多く，そのため

男子に比べて家族と性に関する話題を話す機会が多いとも考えられた（表２，図４）。性情報の情報源は，男女ともに同性の友人が多く，２次性徴という身体的・精神的変化に対して友達同士で情報を交換していることが考えられた。

自尊感情では，男子に比べて女子に自尊感情が低く示された（図５）。女子は，性的成熟期を迎える小学校高学年・中学校で「女性の身体受容」が低いといわれる[7]。女子の不安や悩みが月経，乳房，おりもの，発毛に割合が高く示されたことや，悩みの数が男子に比べて多いことは，このような身体的受容と大きく関連し（図３，４，７），女性の身体的受容にかかわる身体的外見に対しする不満や２次性徴に伴う変化が女子の思春期における自尊感情を低下させる要因になっていると考えられた[7・8]。児童の心身の発育・発達が早期化していることを踏まえて，今年度から新たに小学３・４年生から保健領域で保健学習の充実が図られている。一年間の成長が著しい時期に行う保健学習では，心身の変化を児童生徒が自分のものとして受容できるような個人差や，発達過程をふまえた授業が重要である。また，男女ともに男女交際に不安や悩みを持っていた。性の発達は男女で異なった様相を示し，異性関係に対する考え方や望むものが男女で一致しないことが多く，葛藤や不安が高まりやすいといえる[9]。思春期の生徒が知りたいことして男女交際をあげることが多く[10]，そのことは，実際の性行動に関する知識を求めているとも考えられ，保健学習や保健指導，講師等による講演会の中で男女の意識の違いや行動の違いにも触れ，不安や悩みを解決する具体的な方法を提示していく必要がある。今回の調査で自尊感情は，自分自身が「好き」という意識や自分自身を「大切にしたい」という意識と関連がみられた。調査の中では，「好き」と「大切にしたい」との違いを明らかにすることはできなかったが，自尊感情が性差および不安や悩みの量と関係していることから，「好き」「大切にしたい」という意識が自己の身体的受容とも関連していることが考えられた。

性教育の教え方として「危ないことは危ないと教えてほしい」「教える場合は恥ずかしがらずに教えてほしい」「専門家の話は信頼できる」という意見がある[1]。また，男女ともに「中学の保健体育の先生」から情報を得たいと考えており，STD/HIV 関連の情報を記載したチラシの置き場所として「学校の保健室」をあげているもの多い[1]。このようなことから生徒は，学校での性に関する指導に信頼感を持ち，学校での指導に期待しているとも考えられ，学校での学習も充実していく必要がある。また，性情報を得る情報源は同性の友達が多く，性情報を発信する側にも正しい知識が必要であり，情報を受け止める側もその情報の選択能力を育てる必要がある。近年では，同世代の若者同士が健康教育を行うピア・エデュケーションを積極的に取り入れ，性のとらえ方が肯定的になり，具体的な性行動の選択を自己決定できる行動変容がなされたと肯定的評価を得ている[11, 12]。今後は，教師から生徒に性に関する指導を行なうのと同時に，同世代で行うピア・エデュケーションの視点を含めた効果的な指導を取り入れていくことも考える必要がある。

本調査の質問紙作成及び分析にあたりまして，金沢大学教育学部助教授　長峰伸治先生に御助言をいただきました。また，データ解析は，金沢大学医学部保健学科教授　木村留美子先生の研究室で行なわせていただきました。深く感謝いたします。

参考文献

１）木原雅子他：若者の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究 p228-297，木原正博他，HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究（平成12年度報告書），厚生科学研究費補助金エイズ対策研究事業，

２）木原雅子：青少年の性行動の実態とエイズ教育・性教育に求められるもの，p68-85：平成14年度エイ

ズ・薬物乱用防止教育研修会資料，文部科学省，2002．6．
3）長谷川泰子，橘寿好，村口喜代：10代の性感染症患者の性行動，p81，第21回日本思春期学会総会学術集会抄録集，2002.
4）伊藤直樹，西山直隆他：北海道における性感染症患者数の疫学調査，p80，第21回日本思春期学会総会学術集会抄録集，2002.
5）堀洋道，山本真理子，松井豊：心理尺度ファイル，p67-69，垣内出版
6）西村良二：思春期の心の問題，p337-341，思春期学　Vol.19　No.4．2001
7）鈴木幹子：思春期女子における女性性受容の発達過程，p75-81，思春期学　Vol.19　No.1．2001
8）伊藤裕子：青年期女子の性同一性の発達 p458-467，教育心理学研究　第49集　第4号，2001
9）今川民雄編著：「わたし」をみる・「わたし」をつくる―自己理解の心理学―p61-96，1997
10）日本製教育協会：青少年の性行動―わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告（第4回），財団法人日本性教育協会，1994
11）戸川寮子，荒木田美香子：高校生を対象としたピアエデュケーションの有用性の検討，p79，第21回日本思春期学会総会学術集会抄録集，2002
12）小林紀子，堀江標他：思春期ピア・カウンセリングの有効性―ピア受講群と未受講群の比較検討から―p80，第21回日本思春期学会総会学術集会抄録集，2002